

第7章 事後調査の結果と環境影響評価の結果との比較検討の結果

7.1 工事中に係る事後調査(G 進入路)

7.1.1 赤土等による水の濁り

1) 濁水処理水のSS濃度

工事中における濁水処理水の水質調査結果を表 7.1.1-1 に示した。処理後の放流水は透視度 30cm、SS20mg/L であり、評価図書に示すとおり、環境基準の A 類型を満たす SS 濃度(25mg/L)に適切に処理されているものと考えられた。

表 7.1.1-1 濁水処理水の水質調査結果

地点	測定日	透視度 (cm)	SS (mg/L)	環境保全目標値
G 進入路 No.1	平成 28 年 11 月 22 日	30.0	20	SS : 25mg/L 以下
	平成 29 年 8 月 7 日	30.0	20	

7.1.2 植物

1) 事業実施区域における貴重な植物種の移植後の生育状況

工事中における移植後の生育状況の推移を表 7.1.2-1 に示した。

工事中最終調査時(平成 29 年 9 月)において、 2 株、
 7 株が枯死しており、全体の生存率は 89.5%であった。なお、生育状況を「不明」とした株については、地下部での生存の可能性があることから、生存しているものとした。

また、平成 29 年 9 月以降の結果については「7.2.3 1) 貴重な植物種の移植後の生育状況」に示した。

評価図書においては、移植後の定期・継続的な事後調査を行うことにより、貴重な植物種や、その生育環境が保全できるものとされており、評価図書や検討図書で示した環境保全措置や事後調査が実施できたと考えられるほか、高い生存率であったことから、地域個体群の存続も図られているものと考えられた。

表 7.1.2-1 G 進入路の生育状況

No.	種名	移植株	平成 29 年度	
			生存株 ^{注)}	生存率 (%)
1		1 株	1	100
2		3 株	1	33.0
3		73 株	66	85.7
4		9 株	9	100
合計		86 株	77 株	89.5

注) 生育状況が「不明」となった株も生存株として計数している。

2) 早期緑化帯の植栽種の生育状況

工事中は調査箇所の選定を行ったっており、生育状況については存在・供用時の調査において実施しており、「7.2.3 植物 4) 早期緑化帯における植栽種の生育・形成状況」に示した。

7.1.3 動物

1) 貴重な動物種の移動後の生息状況

移動した [] のモニタリングの結果を表 7.1.3-1 に、
[] のモニタリング結果を表 7.1.3-2 示した。

[] は、モニタリングを実施した5本の生息木のうち平成30年1月の調査で4本について生息が確認され80%の生存率であった。

[] は、1箇所に移動を行った3個体のうち2個体が継続して確認され、70%の生存率であった。また、移植先の環境は工事中に外観でやや乾燥化したものの、存在・供用時にはやや湿潤な環境になっていた。

動物に係る評価図書の予測によると、工事中における土地の改変による影響については移動を行い、影響の低減を図ることとしており、多少の減少が見られたが移動による影響の低減を図ることができたと考えられる。

表 7.1.3-1 [] のモニタリング調査結果

No.	移動年月	生息木	工事中			存在・供用時	
			平成28年10月	平成29年6月	平成29年8月	平成29年10月	平成30年1月
G進-1	H28.9	No.1	○ 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし
	H28.10	No.2	—	○ 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし
G進-2	H28.9	No.1	○ 周辺生息木なし	生息確認なし 周辺生息木なし	生息確認なし 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし	生息確認なし 周辺生息木なし
		No.2	○ 周辺生息木なし	生息確認なし 周辺生息木なし	生息確認なし 周辺生息木なし	生息確認なし 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし
	H28.9	No.3	—	生息確認なし 周辺生息木なし	生息確認なし 周辺生息木なし	生息確認なし 周辺生息木なし	○ 周辺生息木なし
計		5	—	2	2	3	4

注) 「○」は削りかす(生息痕)の確認を示し、周辺の生息状況を併記した。

表 7.1.3-2 [] のモニタリング調査結果

No.	移動年月	移動数	工事中			存在・供用時	
			平成28年10月	平成29年6月	平成29年8月	平成29年10月	平成30年1月
G進-3	H28.9	3	3 やや湿潤	3 やや乾燥	2 やや乾燥	2 やや湿潤	2 やや湿潤
計		3	3	3	2	2	2

注) 巣穴周辺の土壌の状態も併記した。

2) 工事用車両の走行に伴うロードキルの状況

平成 29 年に確認されたロードキルは 3 種 4 個体であり、平成 28 年と比較すると半分以下に減少していた。これは、施工期間や施工状況の違いによるものが大きいと考えられ、横断個体等についても減少している。また、昨年度に引き続き 3 箇所について進入防止柵の設置や低速走行(約 20km/時)を行うことで、ロードキルの発生抑制に努めている。

これらのことから、工事用車両の走行に伴うロードキルの影響は小さいものと考えられる。

調査年/区分	ロードキル		横断個体・自力移動等	
	個体数	種類	個体数	主な種類
平成 28 年	2 種 11 個体	<div style="border: 1px solid red; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></div> (10) ヒメハブ (1)	16 種 90 個体	<div style="border: 1px solid red; display: inline-block; width: 100px; height: 15px;"></div> 、 <div style="border: 1px solid red; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></div> 、 <div style="border: 1px solid red; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></div> 等
平成 29 年	3 種 4 個体	<div style="border: 1px solid red; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></div> (1) <div style="border: 1px solid red; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></div> (1) シロアコガエル (1) カエル類 (1)	11 種 20 個体	リュウキュウメジロ、 <div style="border: 1px solid red; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></div> 、リュウキュウヒヨドリ、リュウキュウオビ等

注 1) カエル類は重複の可能性があるため、カウントしていない。

注 2) 種類の括弧内は個体数を、主な種類は個体数の上位 3 位までの種を示している。